



日本のライフセービング

日本では、「特定非営利活動法人日本ライフセービング協会(JLA)」が、水辺の事故をなくすために監視・救助活動、事故を未然に防ぐための教育活動、福祉・環境保全活動などを行っている。

Photos and Information courtesy of Japan Lifesaving Association

歴史

1961年、日本赤十字社水上安全法救助員の資格を有するライフセーバーによって、日本で初めての海岸沿いにおけるライフセービングが行われた。その後、1978年に静岡県を中心とした「日本サーフライフセービング協会 (SLSAJ)」が立ち上げられ、1983年には神奈川県を中心とした「日本ライフガード協会 (JLGA)」が設立、両団体は環太平洋の国々によって作られた「ワールド・ライフセービング」に加盟した。それまで日本はライフセービングにおいては後進国だったが、同年に豪日交流基金の文化交流の一環としてオーストラリアのサーフライフセービングが日本に紹介されたことにより、積極的にオーストラリアの最先端技術を取り込んでいった。また、1991年にはSLSAJとJLGAが統合して現在のJLAとなり、1994年に設立された「国際ライフセービング連盟 (ILS)」に加盟。更に、2001年にJLAは内閣府の特定非営利活動法人として認承された。

スポーツとしてのライフセービングは、1990年に神奈川県平塚市で、日本における初の国際大会

となる環太平洋選手権大会が開催された。1992年には静岡県下田市で「Rescue92」と呼ばれる世界選手権と世界インタークラブ選手権大会が開催され、ライフセービングは日本国内での認知度を高めた。また、2004年にはアジア太平洋地区ライフセービング選手権大会も開催された。国内では、毎年学生選手権や、室内選手権、全日本選手権などが盛んに行われ、ライフセービング技術の向上に励んでいる。



現在の日本のライフセービング

ライフセービングへの日本社会の関心は年々高まっている。近年では、毎年1,000～2,000人が新たにライフセービングの資格を取得し、2005年までの時点で資格取得者の累計は約20,000人、そしてクラブ数は1998年の63クラブから、約2倍の113クラブとなった。また、資格取得者

の増加により、ライフセーバーが活動する海岸の数も増えている。人命救助としての実績は、1998年から2005年までの間に、16,933人の溺者が救助され、およそ10万人が応急手当を受けた。また、2005年に蘇生処置を受けた溺者のうち、社会復帰を果たした人は63%にもなった。